



～年間聖句～「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」コリントの信徒への手紙Ⅱ 5章17節

“Being” が進路につながる

私は、昔から「ビーイング」という言葉を使っています。この言葉との出会いは、「ビーイング」と題したグループワーク TR を行ったことがきっかけになります。このワークは、自分と、自分たちの在り方を、相手への意識を高めながらつくるワークです。本校生徒もそのワークを経験している学年はあると思います。「自分がされて・言われてうれしい言動」、反対に、「自分がされて・言われて嫌な言動」を【個人→グループ→全体】のプロセスで考え、話し合い、最後に「自分よし・相手よし・みんなよし」を共有します。つまり、「ビーイング」とは、「自分の生き方・あり方」のことになります。生徒は多感なこの時期に、他者と関りながら、「自分はどうか？」と自問自答を繰り返します。そして、自己存在感を高めていきます。これが本校のシンボルワードの「大切なひとり」につながっていくのです。

また、「ビーイング」は、「自分の生き方・あり方」のことなので、キャリア教育の基盤になります。本校での「はないち（本校探究学習）」の時間は、具体的な価値を掴む時間になります。生徒は、探究のテーマを設定する際、「好きなこと（興味・関心）」「得意なこと（能力）」「大切なこと（価値観）」「社会から求められていること（社会）」が重なる部分にテーマを見出そうとします。その中で、「自分はどうか？」「どう生きたいか」ということを考えます。その近未来が大学進学等になります。大学で何を学びたいか、将来どんな仕事をしたいかという視点を持ちます。

ちなみに、進学先や受験から逆算してテーマを選ぶ指導はしません。探究に取り組んだ結果、それが進路や受験につながれば、それはそれでいいし、つながらなくてもいいのです。そもそも探究は、分野横断的なものなので、何らかの関連性があることが多いのです。私の考えはもっとざっくりしていて、テーマが学問分野につながっていればいいとは思ってはいませんが、主に考えることは、**探究を通して、新たな出会いや、つながりが生まれれば、それでいいと思っています。**この機会は、意外と将来につながる人が多いからです。

文科省のデータに、探究に積極的に取り組んでいる学校とそうでない学校との比較調査があります。前者の方が圧倒的に主体性やチャレンジ意欲が高まったというデータがあります。受け身ではなく主体的になるとすべての取組が変化します。この部分は、最上位の目標の「自律的学習者」につながります。実は、教師や親の心配性が、生徒の足をひっぱることがあります。**進学校の行事の取組がすごいのは、主体性があることが、すべてに作用しているからです。本校もそうであるべき学校だと考えています。**

今の生徒は、年内に進路を決める生徒が増えています。それを不安に思う私たち教師なのですが、生徒の中には、「合格が決まったからこそ、残された高校生活で自分がやりたいことに打ち込む」と思っている生徒もいるようです。これも主体性です。

その比較調査には、教師に対してのものもあります。「探究学習は、教師の指導力向上や授業改善に役立つか？」という質問は、ずっと経年変化を見るために必ずあります。8年前は3割くらいだったのですが、昨年は9割以上が「とても思う」「そう思う」になっています。多くの教師が、教材開発のヒントを得たり、指導方法においても気づきを得たりすることが多いのです。今、多くの教師のあるあるで、「探究でもやったよね」と、普段の教科の授業で話します。



生徒たちは、いろいろなことに迷いながら、行ったり来たりしながら、ぐるぐる回ったりしながら、実は前に進んでいます。迷子になって、最短距離でない道を進むと、いろいろな景色と出会います。生徒の探究学習の本質はそれだと考えます。

高校2年生は、1月18日に「はないち（本校探究学習）」の発表会を行いました
本当に、おもしろくて、すごいと思った！

（学校長 重枝 一郎）